

横浜市立大学学術情報センター

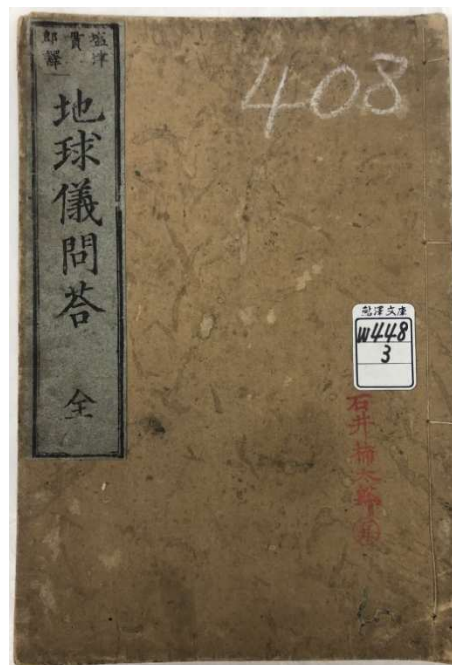
# 貴重書 月替わり展覧会リーフレット (150)

2024年3月の作品は  
「地球儀問答」  
—明治初期の小学校地理—

展示テーマ  
～開化啓蒙的な教育改革～

江戸時代、教育活動は各藩や民間に委ねられていた。武士と庶民は厳格に区別され、武家は指導者としての地位を保つため東洋の古典などを学び教養をつむ「藩校」、庶民は読み・書き・そろばんなど日常生活に必要な実用的・初歩的な教育を行う「寺子屋」というように独自の形態をとっていたのである。また寺子屋で教科書として使われていた「往来物」は、身分や職業に応じて様々な状況に適切に対応できるよう「型」を教えるためのものであった。しかし明治維新後、全国の教育行政を総括する機関として文部省が設置され、国民皆学を掲げた「小学校」が誕生、国内の教育は一変する。

今回取り上げるのは、明治初期、小学校で地理の教科書として使用されていた史料だ。当時、小学校の教育課程は欧米のそれを模範としており、使用された教科書も維新後に出版された啓蒙書や翻訳書が中心であった。民間の教科書も多く刊行され、国民一般に対しても新知識を提供する源として読まれていたという。その驚くほど高度な内容からは、近代的な教育を目指す上で小学校が大いに期待されていたことが窺える。当時の子どもたちは、一体どのようなことを学んでいたのだろうか。



『地球儀問答』(全1巻)  
明治時代、1875(明治8)年  
訳：塩津貫一郎(?~1908)  
版元：京都書林 文華堂  
縦22cm × 横15cm 全19丁

『地球儀問答』は明治初期に小学校の教科書として刊行された問答集である。内容は「問 今指シホス所ノモノハ何ナリヤ」「答 地球儀ナリ」に始まり、「問 地球ハ常ニ静止スルヤ」「答 否ラズ終始運轉スルモノナリ」といったように、問いに答える形式で地球の自転・公転、太陽系の惑星や東西南北、緯線・経線、気候帯といった自然地理的、天文学的な事柄の解説が簡潔に述べられている。本文の漢字には

は全てカタカナで読みがふられており、一文が短く明快で大変読みやすい。2年後、1877年に『地球儀問答：学校必用 再版』が刊行されていることから、広く読まれていたものと思われる。

訳者の塩津貫一郎は、1875年に『世界地図略説』といった地理書の抄訳のほか、1886年に『尋常小學讀本』(全8巻)の編著を担うなど民間の教科書を複数手掛けていた人物である。『世界地図略説』の刊行は1875年3月と『地球儀問答』の刊行(1875年12月)より早く、自転・公転、緯線・経線、気候帯の説明など双方に共通する箇所もある。この『地球儀問答』の底本となった書物にまつわる記述はみられないが、『世界地図略説』の底本となったドイツの地理書などを参照した可能性は考えられよう。

唯一の挿絵(右図)はインド洋を中心に描かれ、日本は東の端におかれているが、六大陸の説明では「亜細亜」を筆頭に述べられているなど日本の読者に配慮した読みやすい構成となっていた。



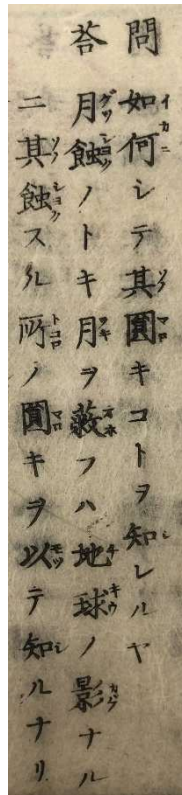
## 展示のみどころ

### ～地球はなぜ丸いとわかったのか～

今指し示す物は何か、地球儀だ。地球儀とは何か、我らが住まう世界を象ったものだ。世界をなぜ地球というのか、玉のように丸いために地球というのだ……淡々とした問答を読み進めていくと、なぜ地球が丸いことがわかったのか（「問如何シテ其圓キコトヲ知レルヤ」）という問いが投げかけられる。それに対する回答は「答月蝕ノトキ月ヲ蔽フハ地球ノ影ナルニ其蝕スル所ノ圓キヲ以テ知ルナリ」（右図）。

月食とは何なのかについての説明はなく、やや唐突な説明にも思える。ところが、同様の説明は同時期に刊行された別の教科書にも見られるのだ。

文部省が編纂した『小学読本 四』（1873年長野県出版）では、火に玉を照らせばその影が丸に、書物を照らせばその影が四角くなるように、「月蝕ハ、太陽ト月トノ間ニ、地球ノ入りテ、其影ノ、月ニ映リタルモノナルニ、月蝕ノ暗キ所ハ、常ニ圓ナルヲ以テ」地球の形が丸いことがわかったと述べている。塩津や文部省が翻訳時に参照した文献に、共通するものがあつた可能性は極めて高い。なお「月食の時に映る地球の影が丸い→地球は丸い」という説明は、古代ギリシャ時代にアリストテレスが『天体論』において指摘したものをふまえていると考えられる。



ここまで『地球儀問答』の内容に着目してきたが、時代背景にも目を向けたい。この教科書は一体どのような生徒によって使われていたのだろうか。

1872年に発布された学制では、下等小学は6～9歳までの4年、上等小学は10～13歳までの4年が原則とされ、進級には試験が必須であった。翌年、師範学校が制定した「下等小学校則」によると、下等小学校において教授の中心となった教科は読物・算術・習字・問答。寺子屋で教授されてきた読・書・算の科目を重んじつつ、新科目「問答」で理科・地理・歴史・修身などを含む近代教科を導入するという構成だ。そのなかで教科書として「地球儀」が示されているのは、第6級（2年前期）の読物と問答、第5級（2年後期）の問答の項目であり、約7、8歳がこの教科書を用いて学んでいたことがわかる。

ところが、「国民皆学」の理念が掲げられていたにも関わらず、就学率は学制の公布から1年後の1873年には28.1%（男57.6%、女15.1%）、5年後の1878年でも41.3%（男57.6%、女23.5%）に過ぎず、日常的に通学していた割合も6～7割であった。その理由としては、教育内容が生活現実とかけ離れていたこと、子どもを労働力とみなす家庭も少なくなかったこと、さらに月31銭という当時としてかなり高額な教育費を払わなくてはならなかったことが挙げられる。二度の試験合格を経て第6級、さらにそれ以上の級へと学びを進め『地球儀問答』を手にとった児童は多くはなかっただろう。だが、明治初期、教育の初級段階から高度な地理教育が行われ、高い理想のもとで教育の改革が試みられていたことは非常に興味深いことである。

### 参考文献

- ・荒井章二（2015）「歴史の証人：写真による収蔵品紹介」『歴博』189、20-23
- ・小針誠（2007）『教育と子どもの社会史』梓出版社
- ・塩津貫一郎 抄訳『世界地図略説』国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/767602>（最終閲覧日 2023-10-23）
- ・塩津貫一郎 訳『地球儀問答：学校必用 再版』東京学芸大学教育コンテンツアーカイブ  
<https://d-archive.u-gakugei.ac.jp/item/18406336#?page=3>（最終閲覧日 2023-10-23）
- ・寺本潔（1985）「学期の小学校における地球儀教授について」『新地理』32（4）、46-53
- ・文部省 編『小学読本 四』東京学芸大学教育コンテンツアーカイブ  
<https://d-archive.u-gakugei.ac.jp/item/10684835>（最終閲覧日 2023-11-01）
- ・文部科学省「学制百年史」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm)  
（最終閲覧日 2023-10-23）
- ・山口諡司（2022）『てんまる：日本語に革命をもたらした句読点』PHP 研究所

### あとがき ～貴重資料に触れて～

「教科書」という誰にとっても馴染み深い史料。気になって調べれば調べるほど楽しく、夢中になっていきました。その過程で、デジタルアーカイブ化された史料に助けられることもしばしば。史料を残し、活かす大切さを学ぶ貴重な時間となりました。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、  
展示品を除き申請が必要です。また、利用は  
学術研究目的に限らせていただきます。

令和6年3月1日発行

令和5年度 日本文化史B受講生 編集  
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2  
横浜国立大学 学術情報センター

第151回展示は令和6年4月上旬からを予定しています。